

- (3) 八木紀一郎 (1983, 2) 「オーストリア学派創始者達の関係資料の現況」, 『岡山大学経済学会雑誌』, 第14巻, pp.457-472
- (4) 溝端剛 (編) (1993) *Transcript of Finanz-Wissenschaft von Prof. Carl Menger (c. 1888)*, 86 p. Study Series, No. 28 一橋大学社会科学古典資料センター
- (5) Streissler, E. W. and Streissler, Monika, ed. (1994) *Carl Menger's Lectures to Crown Prince Rudolf of Austria*, Edward Elger

(京都産業大学経済学部助教授)

フェヌロンの奇妙な人気 Fénelon; His Strange Popularity

森村敏己

MORIMURA Toshimi

18世紀フランスの読書人たちの間でフェヌロンは圧倒的な名声を博していた。もっともよく読まれた作品『テレマックの冒険』は革命までに200を越える版を重ねているし、フランスで最初の版が出た1699年には早くも英語に翻訳された。ヴォルテールは英語のものだけでも14の版を目にしたと語っている。18世紀のベストセラーといえはルソーの『新エロイズ』やヴォルテールの『カンディード』が思い浮かぶが、『テレマック』はこれらに匹敵する人気を誇っていたのである。

この人気はいったいどういうことか。小説としての『テレマック』はいま読んでみてもさほど面白いものとは思えない。少なくとも、常に称賛されてきたその見事な文体とやらを味わうだけの語学力をもたない筆者には、何よりもまず説教臭いのである。もっとも、文学作品に道徳的教訓を求めることは当時として何ら珍しいことではなかった。それに、現在の読者と18世紀の読者とは、小説に求める価値にせよ、感動、共感を生む対象にせよ大きな違いがあることも当然である。だからこそ、「心性」の歴史という分野も成立しうるわけだし、現に、われわれの目には感傷的で甘ったるいばかりの『新エロイズ』を取り上げて、18世紀人の読書のあり方を探った研究も存在する。だとすれば『テレマック』もまた啓蒙時代の人々の思想や感性を知るうえで、貴重な資料だということになるのだろう。しかし、それでもフェヌロンに対するフィロゾフたちの称賛ぶりを見ていると、納得できない部分が残るのである。

フェヌロンは1651年、ペリゴール地方の名家に生まれた。早くから聖職者としてその才能を認められ、1678年から10年間に渡って、カトリックに改宗した元ユグノーを教導する仕事についている。その後、宮廷に迎えられた彼は1689年ルイ14世の孫に当たるブルゴーニュ公の師傳に任じられる。知的ではあるが傲慢、気まぐれで、怒りや欲望を制御できず、他人を公然と嘲笑して憚らない、いわば手のつけられない悪童だったブルゴーニュ公を、節度と礼儀を弁え、国民への奉仕を第一の義務と心得る信仰心篤い青年に変えたとされるフェヌロンの人徳は伝説として語り継がれることになる。ところが、ギュイヨン夫人という神秘主義者との交流が彼の

失寵のきっかけとなった。夫人の教えがボシエらに非難された時、フェヌロンは彼女の擁護に立ちあがる。完全な自己放棄に基づく神への「純粋な愛」を説いて、ボシエを相手に論戦を挑んだのである。ほどなくボシエらの画策によりローマ法王に断罪されたフェヌロンは、ローマの決定に無条件で服従することを宣言し、この「静寂主義」論争は決着する。国王はこの論戦の最中、フェヌロンに宮廷への出入りを禁じ、彼が大司教を務めるカンブレの地に追放した。

フェヌロンの不幸はまだ終わらない。1694年頃にブルゴーニュ公に国王の義務を教えるために書いた小説『テレマックの冒険』の写しが外部に持ち出され、印刷されたのである。ルイ14世は、そこで示された政治思想が自分の政策に対する非難だと考え、フェヌロンからブルゴーニュ公の師傳の地位を奪うと同時に年金も停止、さらに、フェヌロンを父とも慕うブルゴーニュ公に対しても彼に会いに行くことを禁じたのである。この後フェヌロンは戦乱の止まないフランドルの地で聖職者としての仕事に専念しながら晩年を過ごすことになる。1711年には王太子が死亡し、手塩にかけたブルゴーニュ公が王位継承者となる。すでに70歳近いルイ14世の余命を思えば不遇の時代もあとわずかであるかに思えたが、肝心のブルゴーニュ公が翌年急逝してしまう。フェヌロンが世を去ったのは1715年1月、同じ年の9月に死去したルイ14世は最後まで彼を宮廷に呼び戻すことはなかった。

このようにフェヌロンの生涯を辿っていくと、フィロゾフたちが彼に抱いた敬愛の念も理解できないわけではない。宗教論争の犠牲者、絶対君主を批判したために失脚した不遇の人。こうしたイメージは確かに反教権主義、反専制主義を唱える啓蒙思想家たちにとって好ましいものであったろう。また、彼の最初の著作集の編集者であり、伝記作家でもあったラムゼイ以来、フェヌロンの人格は神格化といってよいほどの扱いを受けている。有徳の人でありながら、その徳性は決して堅苦しいものではなく、慈愛心と人類愛に満ちている。論争の際にも節度と温和さを失わず、貧しい農民や戦乱で傷ついた兵士には敵味方の区別なく救いの手を差し延べる。何より戦争を憎み、国王の領土的野心を戒め、大司教という高い地位にありながら、少しの財産も残すことなく、すべてを領民の救済のために捧げた聖職者。これが、18世紀に流布したフェヌロンの肖像であった。もちろん、サン・シモン公爵やヴォルテールのように、宮廷を追放されたのちもフェヌロンは政治的野心を捨てず、いずれ王となるブルゴーニュ公のもとで権勢をふるえる日を夢見ていたとする、少々意地の悪い見方もないわけではない。しかし、彼らにしてもフェヌロンの人格は十分に評価している。それに、こうした意見は称賛の声にかき消されてしまったかに見える。1771年にアカデミー・フランセーズが「フェヌロン賛」を懸賞論文のテーマとした際、これに応募し当選したラ・アルプは彼を野心をいっさいもたない、敵に対してさえ寛大な人物として描いているが、アカデミーにおけるこの論文の朗読は聴衆を魅了し、大成功を収めたといわれる。また、1774年には今度はグランベールがアカデミーで「フェヌロン賛」を朗読する。さらに彼はフェヌロンがルイ14世への歯に衣を着せぬ批判を展開した「ルイ14世への手紙」を初めて公刊し、「専制君主に立ち向かうフェヌロン」というイメージを定着させた。

フェヌロンへの好意的言及はモンテスキューにもディドロにもエルヴェシウスにも見られるが、とりわけ彼を敬愛していたのはルソーである。古代の習俗を好み、逆に近代人の墮落を告発したルソーだが、フェヌロンは例外的に尊敬に値する近代人だった。ベルナルダン・ドゥ・

サン・ピエールが伝えるところによれば、「もし、フェヌロンが生きていたら、あなたはカトリック教徒になっているでしょうね」という質問にルソーはこう答えたという。「もし、彼が生きていたら彼の下男になり、彼のそば近くに仕えられるような人間になりたい」。

もちろん、こうした称賛には各人の思い込みや時には戦略が混じっている。神の限りない善意への信頼から、地獄の存在を信じないルソーは、『テレマック』の中で「あの善良なフェヌロンが本気で信じているかのように地獄について語っている」ことに驚き、「司教ともなれば時には嘘をつかねばならぬこともある」として自らを納得させている。一方、ヴォルテールは晩年のフェヌロンは神学論争など軽蔑していたと主張しているし、グランベールによればフェヌロンは宗教論争において神学より自分の心情を重視した、また彼の道徳は宗教道徳ではなく、自然道徳だったとしている。こうした説明は明らかに、ボシュエやジェンセニストとの論戦に熱心だったフェヌロンの実像を歪め、彼から神学者のイメージを剥ぎ取るための作為的なものである。そして、これに対応するかのようには、フェヌロンの性格の中でも、慈愛心や寛容さといった、フィロゾーフたちが重視する価値が特に強調されているのである。現に、サント・ブーヴは『月曜談話』でフィロゾーフの描くフェヌロンは実像からは程遠いものと指摘しているが、18世紀におけるフェヌロン像の変遷を辿った A. Chérel の詳細な研究 (*Fénelon au XVIII^e siècle en France (1715-1820); son prestige - son influence*, 1917) が示すように、当時、様々な陣営の人々がフェヌロンの名声を自分たちに有利な形で利用しようとしたのであり、何も、フィロゾーフたちの戦略に驚く必要はない。しかし、フェヌロンがローマ法王庁の権威を重視し、激しい神学論争を繰り広げた高位聖職者であり、「自己の幸福さえ顧みず、ひたすら神を愛する」とした神秘主義者だったことはフィロゾーフたちも否定できない事実であった。だからこそ彼らは晩年の心境の変化だの、論争の際も神学は重要ではなかっただのと言いつけているわけだが、そうまでしてフェヌロンを称える理由はいったい何だったのか。揺るぎない名声を誇っているフェヌロンを敵に回すのは不利と見たからであろうか、それとも彼らにとってフェヌロンの長所はその欠点を相殺して余りあるものだったのか。

『テレマック』への評価もフェヌロン本人への評価に劣らず高いものだ。主人公テレマック（ギリシア風にいえばテレマコス）はトロイ戦争の英雄オデュッセウスの息子である。トロイを陥落させた後も数々の苦難に見舞われ帰国できない父を探しに、テレマックは女神アテナが化身したメンートルと共に旅にでる。ところがホメロスの『オデュッセイア』ではスパルタを訪れて以降、帰国するまでのテレマックの消息は語られていない。フェヌロンはこの空白を埋める形で『テレマック』を執筆したのである。テレマックは旅の途上で様々な体験を重ねながら、メンートルから帝王学を学ぶ。統治者はいかにあるべきか、それがブルゴーニュ公のために書かれたこの小説のテーマである。

古代を舞台にしたこの著作をモンテスキューは「この世紀の崇高な作品『テレマック』、そこにはホメロスが息づいている」と評しているし、ヴォルテールも文体と共に、その倫理性を高く買っている。ルソーにいたっては単に称賛するだけでは飽き足らず、何度もエミールをテレマックになぞらえ、エミールの未来の妻ソフィーもテレマックのような青年の出現を待ちわびる娘として描いている。確かに、この小説にはルソーを魅き付ける要素が多い。古代への憧れ、自然への信頼、質素な習俗への称賛、奢侈への批判、農業と人口の重視など。こうした要素はルソーばかりでなく、多くの同時代人、とりわけ、奢侈を否定的にとらえる人々にとっては共通する価値観だったのである。さらに、そこで示される政治・経済思想もフィロゾーフた

ちの共感を呼ぶものだった。フェヌロンは王の権威に限界を設け、王の法への服従を要求しながら、専制国家を厳しく糾弾する。こうした主張はモンテスキューにつながるものだし、商業的富を批判し、農業に真の富の源泉を見る姿勢はフィジオクラートを想起させさせる。とりわけ征服戦争への批判はフェヌロンが力を注いだ点である。「王は国民に奉仕するために存在する」ことを前提にするフェヌロンにとって、王の個人的野心を満たすばかりで、国民には何の恩恵ももたらさない、それどころか負担を押し付けるだけの征服戦争は悪政の最たるものであった。こうした容赦ない批判は、いくらフェヌロン自身が否定しようと、ルイ14世に向けられたものだと考えられた。事実、先述したように『テレマック』はフェヌロンの失寵を決定づけたのだが、この失寵自体、フェヌロンの名声にとっては有利に作用しているのである。

『テレマック』には遠く及ばないものの、1747年に初版が出版された『王国の義務に関する良心指導』（または『王国の義務に関する良心糾明』）も多くの版を重ね、当時の人々がフェヌロンの思想を論じる際の典拠となった。ここでも『テレマック』と同じく、絶対王制への批判が展開されている。彼は過剰な宮廷費の削減を求め、戦費調達を目的とした増税に反対し、売官制度と徴税請負制度の廃止を要求している。

こうした主張だけを見ていると、フィロゾーフたちがフェヌロンを好んだことは何ら不思議ではないように思える。ただ、困ったことに彼の政治思想にもフィロゾーフたちがとても受け入れそうにない、とりわけルソーなら嫌悪したに違いない要素が存在するのだ。それは強烈的な貴族的イデオロギーである。

『テレマック』で奢侈を批判する中でフェヌロンは国民を7つの身分に区別し、各身分が身につけることのできる衣服を細かく規定したうえで、それぞれの身分でいくら傑出した人物であろうと、身分秩序を乱してはならないとしている。そして、第一身分とされるのはもちろん名門貴族なのである。メリトクラシーに基づく社会的流動性を真っ向から否定するこうした見解は、奢侈批判と結び付くことで、商業で成功を収めた平民への敵意を示している。また、『王国の義務に関する良心指導』でも大臣や王の側近への報酬は制限されるべきだとされているが、それは財政上の理由からというよりも、彼らが名門貴族を越える富や威信を獲得することへの予防策なのである。さらに『統治計画案』になると彼の貴族的イデオロギーおよび聖職者としての側面はさらに露骨である。フェヌロンはこの作品で三部会の復活を求め、財政、司法、和戦すべてに及ぶ強大な権限を与えようとするが、ここでも三部会を事実上指導するのは名門貴族である。身分違いの結婚も、官職購入による貴族への昇進も禁じられ、新たな授爵は極力制限される。また、貴族には世襲財産が与えられたうえ、分割相続の禁止と商業の許可によって貴族の没落は防止される。軍事においても民事においても、すべての分野で貴族が優先され国家を指導するいわば貴族国家が彼の理想であった。王権による中央集権的支配の重要な道具であった地方長官は当然、廃止される。一方、教会に関して彼は聖俗両権力の独立を説いているが、力点が置かれているのは教会に対する国家の不介入である。ローマ法王の教書に国家は異議を唱えてはならず、教書で定められたことはただちに国内で法として執行しなければならない。

『テレマック』はもとより、『王国の義務』に比べても『統治計画案』はさほど読まれていなかった作品である。しかし、前二者を読むだけでもその貴族主義は明らかだ。もちろん、18世紀の政治思想において *thèse nobiliaire* と呼ばれる貴族的イデオロギーは大きな潮流の一つであり、モンテスキューの思想もこれを無視しては理解できない。だが、ヴォルテールやダラ

ンペール、そして誰よりもルソーがこうした側面に目をつぶるのはどうしたことか。

確かにフェヌロンの思想、人格の中にはフィロゾフたちを魅きつける要素はあった。しかし、彼らにはとうてい受け入れがたい要素もやはり強烈に存在していたのである。にもかかわらず、18世紀を通じて輝きを失うことのなかった彼の人気には、ある種の「奇妙」さを感じずにはいられないのである。
(一橋大学社会学部講師)

社会科学古典資料センターに着任して

渡 会 勝 義

私は、1995年4月1日付で永井義雄先生の後任として本センターに着任致しました。それまでは本センターについては利用者の1人にすぎず、ほとんど知識がありませんでした。着任して半年余りたち、徐々に様子がわかってきました。この間に得たセンターの印象、センターの今後の課題について考えたことなどを、若干記してみたいと思います。

センターが設立されたのは私がこの大学の大学院を終えた後であったので、当然のことながら4月に着任するまで書庫内は見たことがありませんでした。大学院在学中にはメンガー文庫などの貴重書は図書館の4階の部屋に置かれており、メンガーがどのような本を読んでいたのかという興味から何回か覗いてみたことがあったので、それを少し上回る規模を想像していました。しかし、実際に見て予想をはるかに上回る規模に驚きました。考えてみれば、私が大学院を終えてから20年の月日がたっており、その間に一橋大学はフランクリン文庫をはじめ大型のコレクションをいくつか入れており、規模が大きくなっているのも当然であったのです。

こうした規模の大きさに比べて、予算が少ないことにはさらに驚きました。現在のセンターの専門図書購入予算は年間200万円程度です。センターに着任するまでいた私立大学では、私は図書の購入に熱心であったこともあって、1人でそれよりも多い予算を使わせてもらっていたので、この程度の予算でいったい何ができるのか、正直なところ心配になりました。スタッフが少ないことにも驚きました。センター教授以外には、助手2人、事務官1人がいるのみです。その助手2人も学内のやりくりで何とか確保しているという状態です。特に気になったのは、技官がいないことです。

10月にはセンター主催の西洋社会科学古典資料講習会をはじめて経験しました。その趣旨は、西洋社会科学古典資料の取り扱いや保存にかんする知識を普及することであり、講習会がその目的に役立つのはもちろんのことですが、全国からこられた図書館員の方々に西洋社会科学の古典を利用する研究者が何を考え何を必要としているかを理解していただく機会としてきわめて重要であるという印象を持ちました。逆に講師となった研究者の方々にとっては図書館員の方々が抱えている困難を知ることもなります。

次に、この半年余りで知ったセンターが置かれた状況とさまざまな人々から聞いたセンターに対する意見を踏まえてセンターが抱えている課題について個人的に考えたことのうち、3点について記してみます。

第1に挙げなければならないのは、センター所蔵資料の利用の便と保存をどのように両立させるかという問題です。着任して多く聞いた声は、センターの所蔵資料の利用が不便だとい